

(北野 PPT 第5章 該当問題)

令和1年度

試Ⅲ - 32

問題11 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

教師は第二言語学習における個人差を多面的に捉える必要がある。例えば、動機づけ^Aは言語学習を継続する原動力となる。また、動機づけは学習段階によって変化する^Bと言われ、教師はそれに応じた働きかけを行う^Cことが推奨される。さらに、学習者のピリーフ^Dも学習に影響を及ぼしている。その他に、キャロル (J.B.Carroll) の示したように言語適性^Eにも個人差がある。教師はそうした個人差や学習の段階に配慮しながら、学習者オートノミーを育成するよう努めることが望ましい。

問1 文章中の下線部A「動機づけ」のうち、内発的動機づけの例として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 日本語は必修科目なので、単位を取って大学を卒業したい。
- 2 日本語や日本文化を学んで、知識を増やし教養を高めたい。
- 3 日本の大学院で学位を取り、今より待遇のよい仕事に就きたい。
- 4 日本語科目でよい成績を取り、奨学金に応募したい。

問題10 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

第二言語習得は学習者の情意要因の影響を受けると考えられている。この考えは情意フィルター仮説^Aとして知られている。また、第二言語学習において生じるネガティブな感情は第二言語不安^Bと呼ばれる。

学習者の情意要因に配慮して開発された教授法にコミュニティ・ランゲージ・ラーニング^Cがある。ジャーナル・アプローチ^Dも、第二言語不安を軽減する方法の一つとして知られている。これらを踏まえて、教師は学習者の不安を軽減するような授業運営^Eをすることが望ましい。

問4 文章中の下線部D「ジャーナル・アプローチ」の実践例として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 教師は学習者にその日に習った文法項目や語彙を使って日記を書かせ、添削する。
- 2 教師は学習者に授業の感想を日記に書かせ、内容の理解度や参加態度について評価を行う。
- 3 教師は学習者に異文化に対する気づきを日記に書かせ、授業で異文化受容について指導する。
- 4 教師は学習者に日記を書かせ、学習者と日記を通じて感じたことを率直に伝え合う。

問題9 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

第二言語学習において教師は学習者の特性をどう考慮すべきだろうか。学習者は一人一人認知スタイル^Aが違う。また、学習ストラテジー^Bも学習者によって異なることが分かっている。例えば、新語を記憶する方法の一つとしてキーワード法^Cがあるが、誰にでも有効であるとは限らない。さらに、学習者の特性には言語適性もある。この言語適性の構成要素として、スキーハン（P.Skehan）は音韻処理能力^D、言語分析能力、記憶力の三つを挙げている。他にも動機づけ^Eや学習者自身のビリーフも言語習得に影響を与えると考えられている。

問1 文章中の下線部A「認知スタイル」に関する記述として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 「思考型」の学習者は課題に曖昧な部分があっても寛容に受け止めようとする。
- 2 「内向型」の学習者は課題に対して感情を重視した価値観で判断しようとする。
- 3 「場依存型」の学習者は物事の詳細を見ることよりも全体を捉えようとする。
- 4 「場独立型」の学習者は課題について推測力を働かせ、直感的に反応しようとする。

問2 文章中の下線部B「学習ストラテジー」に含まれるストラテジーとその例の最も適当な組み合わせを、次の1～4の中から一つ選べ。

	ストラテジー	例
1	認知ストラテジー	定期的に計画を立てて学習を進める。
2	社会的ストラテジー	人前でうまく話せたと自分を褒める。
3	情意ストラテジー	目標言語の母語話者の友達を作る。
4	補償ストラテジー	文脈から分からない語を推測する。

問4 文章中の下線部D「音韻処理能力」に関する記述として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 成人の第二言語習得には関わらないが、子どもの場合は重要である。
- 2 インプットと既有知識の共通点を抽出し、一般化する際に関わる。
- 3 未知の音を識別する能力やそれを記憶する能力を含む。
- 4 学習の初期段階より学習が進んだ段階で習得に有利に働く。

問5 文章中の下線部E「動機づけ」に関して、「統合的動機づけ」の例として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 日本のアニメを字幕なしで楽しみたい。
- 2 昇進して給料を上げたい。
- 3 漢字の成り立ちについて知りたい。
- 4 日本人について理解を深めたい。

問題16 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

近年、卒業後に日本国内で就職する留学生は増加傾向にある。2008年に発表された「留学生30万人計画」では、留学生の国内就職の推進が掲げられた。留学生が日本国内で就職する際に取得する主な在留資格は、「技術・人文知識・国際業務」である。また、2019年には、新たに在留資格「特定活動（46号）」が設けられ、留学生の就労の選択肢が増えた。

日本語教育においても留学生の就職支援が積極的に行われるようになっている。ビジネス日本語の指導には、職場で起こり得る異文化間の摩擦や問題の解決を目指したケース学習が取り入れられている。また、インターンシップに参加する留学生の増加に伴い、状況的学習論の立場からインターンシップにおける日本語習得の研究も行われている。

問5 文章中の下線部E「状況的学習論」における学習の捉え方として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 ある実践の共同体への参加の過程とアイデンティティの形成を学習と捉える。
- 2 主体的で対話的なプレゼンテーションやディスカッションを学習と捉える。
- 3 いかに関言語を学ぶかという「学び方の学習」そのものを学習と捉える。
- 4 周囲の人たちの言葉の模倣とそれに対する承認の繰り返しを学習と捉える。

問題 6 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

日本語教育の指導や学習の方法は進化を続けている。言語形式に注目したインプット強化^Aなどの指導法がある一方で、最近ではアクティブ・ラーニングが注目されている。アクティブ・ラーニングの土台となる学説には、ヴィゴツキー（L.S.Vygotsky）の最近接発達領域（ZPD）^Bなどがある。その実現方法の一つとして、プロジェクト型学習^Cが挙げられる。活動の中では、学習者の能動的な学びを引き出すためにKI法^Dが使われることがある。また、ジグソー法^Eを使って情報や意見のやり取りが行われることもある。

問 2 文章中の下線部B「最近接発達領域（ZPD）」の概念に基づく考え方として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 学習者は、自分より能力が高い仲間と関わることで刺激を受け、学び、一人ではできないこともできるようになっていく。
- 2 学習者は、日常の「なぜ」という疑問から出発し、実践への転換、反省という過程を繰り返しながら、学びを拡張していく。
- 3 学習者は、共同体の正式な構成員として社会的活動に参加し、参加の形を少しずつ変化させながらより深く関与できるようになる。
- 4 学習者は、生理的欲求や安全、帰属などの低次の欲求が満たされた後に、承認、自己実現といった高次の欲求を求めるようになる。

問題8 タイの高校における日本語クラスで行った授業に関する次の資料を読み、後の問い（問1～5）に答えよ。＜資料＞は授業の概要である。

＜資料＞ 授業の概要

授業デザイン	内容言語統合型学習（CLIL）を取り入れ、特定の内容を日本語で学ぶ A 授業を設計する。
活動の流れ	<p>① 授業の目標と活動の流れを説明する。</p> <p>② 話し合いのテーマを学習者に伝える。 (テーマ：「ごみとリサイクル」)</p> <p>③ 資料1《ごみ焼却炉数各国比較表》と資料2《千葉市のごみの出し方に関するルール》を配付し、 B 「ごみとリサイクル」についてグループで話し合わせる。</p> <p>④ 日本とタイの「ごみとリサイクル」に関する読解用の資料を複数用意し、 C スキミングのスキルを使って読むように促す。</p> <p>⑤ クラスで日本とタイの状況を比較させたうえで、タイの「ごみとリ</p>

問3 ＜資料＞の下線部C「スキミングのスキルを使って読む」例として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 テーマに関する文章を読み、使われている文法や文構造を理解する。
- 2 テーマに関する文章を読み、文章全体の大まかな意味を理解する。
- 3 テーマに関する意見文を読み、一文ずつ事実と意見とに分類する。
- 4 テーマに関する図表を見て、必要な情報をできるだけ速く探す。

問題11 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

現在、日本では日本語を母語としない児童生徒が増えており、現場の実情に応じて、彼らに対する支援が行われている。児童生徒の言語に関わる能力^Aは一人一人異なるため、一様の対応は難しい。児童生徒の支援に当たる者は、フィードバック^Bの方法を含めて一人一人に合わせた対応が必要である。また、児童生徒の不安を軽減するような適切な対応や指導^Cが求められる。

年少者の場合には、第二言語の習得が進むにつれ、母語が失われていくことがある^D。精神的な安定やアイデンティティの確保のためには母語保持^Eに関しても同時に考えることが重要である。

問1 文章中の下線部A「言語に関わる能力」に関する記述として最も適切なものを、次の

1～4の中から一つ選べ。

- 1 生活言語能力（BICS）も学習言語能力（CALP）も母語で培った認知能力が発達を妨げる。
- 2 生活言語能力（BICS）も学習言語能力（CALP）もコミュニケーションを介して発達する。
- 3 学習言語能力（CALP）は生活言語能力（BICS）より場面依存的である。
- 4 生活言語能力（BICS）は学習言語能力（CALP）より習得に時間がかかる。

問題 9 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

ある年齢を過ぎると第二言語の習得が難しくなると言われている。「臨界期仮説」は、^Aこのような考え方を説明するもので、バイリンガル教育においても注目されている。

二言語併用下にある外国人児童生徒等は、バイリテラルに育つ可能性がある。その一方で、^B教科の成績が上がらないといった問題を抱えているケースが見られる。そのため、学習言語の解明とその養成のための指導が検討されてきた。学習言語は、言語的側面、認知的側面などから成るとする説がある。その説を説明する概念として、カミンズ (J.Cummins) の^C学習言語能力 (CALP) がある。またカミンズは、第一言語と第二言語の関係について^D二言語基底共有説 (氷山説) も提唱しており、国内外のバイリンガル教育において広く^E参照されている。

問 2 文章中の下線部B「バイリテラル」の説明として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 「聞く」「話す」「書く」は一言語で「読む」は二言語で十分に発達していること
- 2 「聞く」「読む」も「話す」「書く」も二言語ともに十分に発達していること
- 3 「聞く」「話す」が二言語ででき、認知・行動・心情面で文化を習得していること
- 4 「聞く」が二言語ででき、認知・行動・心情面で文化を習得していること

問4 文章中の下線部D「学習言語能力」に関する記述として最も適当なものを、次の

1～4の中から一つ選べ。

- 1 「認知力必要度」が低く、「場面依存度」が高い言語活動ができる。
- 2 「認知力必要度」が低く、「場面依存度」も低い言語活動ができる。
- 3 「認知力必要度」が高く、「場面依存度」も高い言語活動ができる。
- 4 「認知力必要度」が高く、「場面依存度」が低い言語活動ができる。

問5 文章中の下線部E「二言語基底共有説」に関する記述として最も適当なものを、次の

1～4の中から一つ選べ。

- 1 数学等の概念的知識や学習ストラテジーは、二言語間で転移する。
- 2 第二言語による基本的な対話能力は、2年程度で習得できる。
- 3 二言語を同等に使うためには、母語による認知能力の発達が必須である。
- 4 二言語は独立して機能し、頭の中の限られたスペースで二つが共存している。

問題 6 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

外国語教育の教授法は時代によって変化する。オーディオ・リンガル・メソッド、コミュニケーション・アプローチを経て、1980年代にはアメリカで内容重視の指導法（CBI）^Aが体系化された。その流れを受け、カナダではイマージョン教育が生まれ、成果を上げた。^B

内容を重視した方法には、ほかに1990年代にヨーロッパで生まれた内容言語統合型学習（CLIL）がある。その特徴は、Content（内容）、Communication（言語知識・言語使用）、Cognition（思考）、(ア) という四つの概念（4C）に沿って、計画的に内容・方法・教材を検討し、実施する点にある。また、CLILでは、スキャフォールディングなど六つの特徴の下に、指導法が具体的に示されている。^C そのほかに、コミュニケーション重視の流れを受けて提唱されたタスク中心の教授法（TBLT）^Dもある。

※問1、4、5は答えに迷う選択肢なので省略

問2 文章中の下線部B「イマージョン教育」の説明として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 支援者に横に付いてもらいながら、目標言語の母語話者と同じ授業を受ける形態
- 2 目標言語が話せない状態で、目標言語の母語話者のクラスに入って一緒に学ぶ形態
- 3 特定の授業で、在籍するクラスとは別の場所に通級して目標言語を学ぶ形態
- 4 全員が非母語話者のクラスで、理科や数学などの教科を目標言語で学ぶ形態

問題9 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

近年、文化間移動をする子どもが増えている。子どもと大人の第二言語の習得には異なる特徴がある。^Aカミングズ（J. Cummins）は、子どものバイリンガリズムについて敷居（閾）仮説^Bを提唱した。また、子どもの場合、よりのほうが習得に時間がかかることも指摘している。

学齢期の子どもが第二言語として日本語を学習する際にも、いくつかの特徴が見られる。^Cそのほか、学習には内発的動機づけ^Dも関与している。

問2 文章中の下線部B「敷居（閾）仮説」に関する記述として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 第一言語が十分に身に付いていない場合は、第二言語も身に付きにくい。
- 2 二つの言語が年齢相当に発達している場合は、認知発達に正の影響がある。
- 3 一方の言語の習得が進むほど、もう一方の言語の能力は低下していく。
- 4 表面上は二つの言語の能力は異なるが、根底には共有する言語能力がある。

問3 文章中のとに入れるのに最も適切な組合せを、次の1～4の中から一つ選べ。

	(ア)	(イ)
1	談話能力	語用論的能力
2	語用論的能力	談話能力
3	学習言語能力（CALP）	生活言語能力（BICS）
4	生活言語能力（BICS）	学習言語能力（CALP）

問4 文章中の下線部Cに関する記述として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 会話が重要で読み書きを学ぶ必要はない。
- 2 必要な語彙や学習の順序が大人と異なる。
- 3 自分の意志によって開始されることが多い。
- 4 教科の知識と日本語を同時に学習する必要性は低い。

問5 文章中の下線部D「内発的動機づけ」の例として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 日本語で好きな漫画を読めるようになりたい。
- 2 日本語の大会で賞金を獲得してゲームを買いたい。
- 3 クラスで一番の成績を取って褒められたい。
- 4 いい学校に合格して家族の期待に応えたい。

問題10 次の文章を読み、下の問い（問1～5）に答えよ。

教師は第二言語学習における学習者の特性を考慮する必要がある。第二言語学習に影響を与える要因に、学習ストラテジー^Aがある。また、学習スタイルも学習に影響を与える。物事の認知に関わる学習スタイルとして、1970年代から30年ほど盛んに研究されていたものに「場独立型」^B「場依存型」の区分がある。ほかに「総合型」^C「分析型」という分類もあり、知覚に関しては、「視覚型」「聴覚型」「運動型」「触覚型」という分類がある。

教師は学習者に対して、学習スタイルを広げていくよう働きかける^D機会を設けるとよい。同時に、学習ストラテジーを意識させること^Eも重要である。

問1～3は令和3年度試験Ⅰ問1と似た問題のため、カット。

問4 文章中の下線部Dの例として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 視覚型の学習者に、劇に参加してせりふのある役を演じるよう働きかける。
- 2 聴覚型の学習者に、交流会で初対面の人たちと会話するよう働きかける。
- 3 運動型の学習者に、グループで街頭インタビューをするよう働きかける。
- 4 触覚型の学習者に、料理を作りながら道具の名前を覚えるよう働きかける。

問5 文章中の下線部E「学習ストラテジーを意識させること」が重要である理由として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 注意や記憶などの認知資源の容量を拡張させる手段を獲得する必要があるため
- 2 自律的に学習に取り組み、多様な学習方法を選択できるようになる必要があるため
- 3 教師の働きかけによって他者と協働的に外国語を学ばせることは困難であるため
- 4 学んだ外国語の数が増えるにつれて、学習をモニターすることが困難になるため